Book Review 35-5 仕事　＃シリウスの道

『＃シリウスの道』（藤原伊織著）を読んでみた。著者は1985年、『ダックスフントのワープ』ですばる文学賞受賞。『テロリストのパラソル』で江戸川乱歩賞、直木賞を受賞。

本書は広告業界を舞台とした長編ミステリー小説である。2003年から2004年まで週刊文春に連載され、2008年にWOWOWでドラマ化された。シリウス（Sirius）とは、オオイヌ座で最も明るい恒星で、全天21の1等星の1つで、太陽を除けば地球上から見える最も明るい恒星だそうだ。少年期に主人公たちが見た場面がタイトルになっている。著者はかつて電通に勤務していたということなので、広告業界の内幕が余すことなく描かれている。

二つの話が並行して進行する。主人公Tの勤める広告代理店T広告に、それまで取引のなかった大手メーカーD電機から突然予算18億という巨額プロジェクトの競合の指名を受ける。その受諾を得るために社内の力を結集して奮闘する。果たして受諾が取れるのか。
そのTには、KとA子という幼馴染みがいた。中学生時代、大阪で三人は貧しいながらも助け合って生きていた。3人はA子の義父とA子の関係、そして、義父の死の真相に関する誰にも言えない秘密を抱えていた。その3人しか知らないはずの秘密について、それから25年後にA子の夫（D電機のトップ）に脅迫状が届く。その犯人は誰なのか。Tは消息の分からない幼馴染のKを探し始める。またD電機の突然の指名は、脅迫状と関係があるのか。

Tと才色兼備の女性部長A子との関係にやきもきする。政治家の息子でコネ入社ながら仕事に関しては一生懸命な若手Tの成長物語にもなっている。
元証券会社勤めの派遣社員Hの活躍も目覚ましい。自己中心的でカネの亡者の上司との最後まで続く罵詈雑言合戦も面白く読める。その中に中小企業や下請け業者の悲哀も書き込まれている。

登場人物たちの会話にはエスプリがきいている（批判精神に富んだ軽妙洒脱で、辛辣な言葉を当意即妙に述べる才のこと）。

果たして巨額プロジェクトを獲得できるのか、上司との闘いに勝ち残れるのか、脅迫犯は誰なのか、について最後までワクワクしながら読み進めることができた。どの業界も人間関係の軋轢は尽きない。